

平成29年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

平成30年4月9日現在

研究課題名	「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究				
申請者 (代表者)	氏名		所属機関・職		
	阿部賢一		東京大学・准教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	阿部 賢一	東京大学・准教授	チェコ文学	研究総括 (チェコ語文学)
	2	三谷 研爾	大阪大学・教授	ドイツ文学	研究分担 (ドイツ語文学)
	3	井上 暁子	熊本大学・准教授	ポーランド 文学	研究分担 (ポーランド語文学)

研究成果の概要

本研究は、ポーランド語でシロンスク (Śląsk)、チェコ語でスレスコ (Slezsko)、ドイツ語でシュレージエン (Schlesien) と呼ばれる地域が、ポーランド、ドイツ、チェコの文学史においてどのように位置づけられ、表象されてきたか、文学史の記述を中心に検討することを目的とするものである。従来の文学研究では「シレジア」は「中心と辺境」といった国民文学の平面的な関係性で位置づけられることが多かったが、本研究では通時的な「連続性」と空間的な「可変性」という立体的な側面に着目し、とりわけ、各国文学史における「シレジア」の表象という点を中心課題に置き、ポーランド、ドイツ、チェコのそれぞれの文学史・文学研究における「シレジア」に関する記述を通時的かつ共時的に分析することを意識して行なった。

個別の資料収集を経て、2回にわたって研究会を行なった。

まず2017年10月1日には、東京大学(本郷キャンパス)で科研費・基盤研究(B)「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」(代表、井上暁子)との合同での研究会を行なった。井上と阿部が、それぞれ「ポーランド語圏における「多言語性」をめぐる研究動向について」、「リージョナリズム(regionalism)と文学記述：シレジア文学(チェコ語)の事例」という題目で報告を行ない、議論を交わした。この中で、ディアスポラや植民地主義といった文脈で議論を展開する可能性、ならびに地域記述の多様性の問題点などが確認された。

研究成果の概要（続き）

次に2018年3月3日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにて、研究報告会を行ない、井上、三谷、阿部がそれぞれ「ポーランド語圏」、「ドイツ語圏」、「チェコ語圏」の視点から報告を行なった。井上は、上シレジアの精霊が土地の記号的な役割を果たしており、現代の文学においてもその傾向が見られることを指摘した。三谷は、アルノ・ルボス著の『シレジア文学史』の詳細な分析を行ない、巻により記述の揺れがある点に注目し、同文学の境界の可変性に触れた。阿部は、シレジア出身の詩人ベズルッチの詩集の文学史受容の変遷をたどり、シレジアという記号の内実の不確定さが論者によって適宜自由に活用されている点を指摘した。

以上、短期間の研究であったものの、三つの異なる視点を重ね合わせることで「シレジア」という地域の可変性が分かり、時代や文脈によって自在に解釈されてきた経緯の一端を明らかにすることができた。また、このようなアプローチにより、多言語、多民族からなる中東欧の文学研究においても一定の普遍的な傾向を明らかにすることができるほか、その他の地域の文学研究においても資する点があることを提示することができたように思われる。

研究の成果は、今後、他の研究者との共同でのシンポジウム、あるいは論文といった形で公表し、共有を図る予定である。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

- ・ 阿部賢一「シレジア文学史の諸相——ペトル・ベズルッチの受容（仮）」『れにくさ』投稿予定（謝辞有）。
- ・ 2018年10月、東京大学で予定されているシンポジウム（科研費・基盤研究（B）「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」（代表、井上暁子）主催）で、井上と阿部が本研究を基にした報告を行なう予定。

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

科研費・基盤研究（B）「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」（代表、井上暁子、2015-2018年度）は、本研究とも関係が深く、上記シンポジウム等で研究成果の共有を図る予定である。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。